

「柏崎の水」

みょうじん 明神のよだれ清水

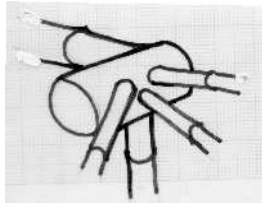
安田駅裏の 9-1 号線は田圃の中である。中鱈石に向って右手山添いの村が明神、左が鳥越で、信越線に架かる国道 252 の陸橋が見える。鳥越と加納の境の交差点手前から、右側明神へと続く山添いの道を、100 メートル位入った所にこの清水がある。柏崎の伝説集には載っていない水だが、村の人達は「よだれ清水」と呼んでいる。管を使って出ている水がちょうど牛のよだれのようなのだという。

この水は、「上水道が出来る前までは、鳥越の人達の飲料水として、大切な役割を担っていた」（田尻漫歩今むかし）。

また、「鱈石川沿いの村々では井戸水が悪く、田尻では田尻山だけがいい水であったといい、安田では、山の横穴から竹の樋で水を引き、分け水と称して、木の口に利用する家数の穴をあけ、その穴で二軒、三軒と分水して用いたという」（柏崎市史資料集 - 民俗篇）。

安田の人達は、長者が堀の山、城の組の姥が谷、明神の山からの水を何百メートルも引いて、生活用水として利用していたと、地元の人が言っていた。

分け水



明神のよだれ清水

〔水田と地名〕 ところで、水田が開けていった様子について、勝田忘庵の「こんじゃく柏崎」（昭和 32 年）では、安田から西の鏡沖に向けて田圃が進展していった様子を地名から推察している。

まあ安定した田圃「安田」があり、これが西へのびていったはしっこが「田尻」、さらに西の沼地だった半分を田にすることができて「半田」、いよいよ鏡沖を水田にかえていって「田中」の出現となる。室町時代以前 600 年位前からのことであろうと記されている。なお、地名の由来については、各町内に残る古記録がたよりとなるが、一般的には伝説集や、「角川日本地名辞典」、「日本歴史地名大系」などが参考となる。



参考資料

- | | | | |
|-------------------------|------|--------------------------|------|
| 「田尻漫歩今むかし」 田尻公民館 | 1999 | 「こどものための柏崎物語」 笹川芳三著 柏崎日報 | 1963 |
| 「柏崎市史資料集 民俗篇」 柏崎市編発行 | 1986 | 「角川日本地名大辞典 新潟県」 角川書店 | 1989 |
| 「こんじゃく柏崎 64」 勝田忘庵著 柏崎日報 | 1957 | | |